

## 9 釣れ釣れなるままに

2016年思い出の釣行記 PART. 7

# 秘密の釣り場

## 鹿島釣狂

### 【秘密の釣り場】

天気は上々だ。昨年の苦小牧港でのアナゴ釣りの折に、隣の釣り人が教えてくれた秘密の釣り場に出掛けることにした。7月に4週続けて真ガレイを大釣りしたというのだ。その時の話がこうだ。

「釣りの相棒が脳溢血に当たってしまった。足に麻痺が残っていたので、自分が釣り場に案内することになった。今までのような険しいところは行けないので、車を横付けして竿を簡単に出せる所を選んでいる。元気だった彼が秘密にしていた釣り場があった。話の端々から、噴火湾のある場所を特定した。今年の7月、4週続けてそこに入った。

その時の釣果が凄かった。1週目は58枚。40cm以下はリリースしてもだ。イソメの2千円分を使ってしまって、地元の釣具店で2千円分を追加した。次の週ははじめから4千円分のイソメを用意していった。真ガレイが62枚だった。3、4週目では数は落ちたが同じような釣果だった。」というまさに夢のような話なのだ。真偽の方はともかくとして、その半分、いや4分の1でも、私としては万々歳なのだ。彼の話の端々から私もその場所を特定した。

6月28日、歯科医院の治療を終えて正午にはその場所に向けて出発した。高速を使わずに中山経路で4時間弱の距離だった。釣り場は閑散としていて地元の老人が一人竿を出していた。話し掛けて様子を伺うが、倶知安から来た釣り人が釣果もなくやめてしまったので、その後に入ったということだった。昼からやってイシモチが少し釣れただけだとビニルバケツの中を指差した。なるほど30cm弱のイシモチが4、5枚入っていた。

そして、例の苦小牧の釣り人の話にあって真ガレイを釣りに来たと話したが、「そんなものここで釣れた試しはない。釣れるのはイシモチに混じって、たまに砂ガレイが釣れるくらいだ。婆さんと二人分の晩飯のおかずにはもう充分なのでそろそろやめようと思っている。」と話された。



私は一人竿を出す

岩見沢から来たという釣り人が、ヒラメやサクラマス狙いでルアーを飛ばし始めた。私もそうなのだが、岩見沢からということは満更悪い釣り場ではないらしい。しかし、魚を掛けることなく次の釣り場へと去っていった。

手の平級のイシモチが何枚か釣れた。そしてイシモチよりよく釣れたのはタカノハだ。それもリリースサイズのものばかりで大物はいなかった。

サクラマスを狙って地元のルアーマンが二人やって来た。しばらくやっているうちにその内の一人が魚を掛けて、もう一人がタモを差し出して掬い上げた。40cmほどのサクラマスだった。



地元のルアーマン升谷君

生イソメを2パック買ってきていたが、1パックを使い切ってしまった。万が一のために塩エラコも持ってきているが、この釣れ方だと明日は使うこともないだろう。暗くなってきたので車で休むことにした。天気予報では穏やかなのだが、天気が急変して万が一釣り場に波が上がってきては大変なので車を高いところに移動させた。

まだ夜が明けきらないうちに、昨日の地元の釣り人がやって来た。若松氏と名乗り82歳の大先輩だった。「お前がここに泊まるというので、一緒に釣ろうと思ってな」と竿を出し始めた。私も、昨日と同じ場所に三脚をセットして釣り始めることになった。若松氏は、「あんたは遠投派だね。130mぐらい飛ばしているのではないか。竿の音が違う。俺はせいぜい50mぐらいだ。それでも釣れ方は変わらないね。」などと気さくに話し掛けてくれた。随分と話し好きのようだ。彼の餌は塩エラコで6月10日作成のものだった。エラコはこの付近で獲れたものに塩をしておいてあるので買うことはないと言われた。ホッキも時化の時に打ち上がったものを拾って冷凍にしてあって、それがたくさんあるのでエサに不自由することはないそうだ。羨ましい。

若松氏が大きな魚を掛けたようだ。「この魚はなんだべ？」と聞くのでタカノハのことを教えて上げた。彼はタカノハを釣ったことがないということだった。この時、私には35cm以上のタカノハが3枚になっていた。



若松氏 彼はタカノハのことを知らなかった。

手稲からのルアーマンがやはりサクラマスを狙ってやって来た。この場所の常連なようで秋にはここでサケ釣りもするという。2、3度ルアーを振り込んで頻りに場所を変えている。その彼が魚を掛けた。大物のようだ。自分で背中にしていたタモを差し出し、手際よく掬い上げた。メジャーを当てると54cmを指していた。



手稲の釣り人

俱知安から来たという釣り人が私と若松氏の間に入った。彼もここにはよく来ているがやはり真ガレイは釣れた試しがないといった。苫小牧港で聞いた話をするに「そんなの嘘に決まっているべ。この辺では最近タカノハが釣れる様になったが真ガレイは釣ったことがねえ。だまされているんだあ。」と話した。

そんな時、私の遠投した竿に真ガレイが釣れた。俱知安氏と若松氏に魚を見せると、「おう、本当だ。ここに真ガレイがいるんだね。苫小牧氏のいうことも満更嘘でねえかも知れねえな。しかし、40cm以上が何十枚というのはやっぱり眉唾物だよな。」と結論はそこに行き着いてしまうのだった。

私が、大きなカレイを掛けた。上げるのに躊躇していると、若松氏が掬ってくれた。50cmには僅かに届いていなくて49cmだった。若松氏がすぐに「苫小牧氏が言ったのはイシモチのことではないのか」と言った。

昼になり、苫小牧氏の言うような釣りにはならなかったが、カレイの引きは十分堪能したので引き上げることにした。帰りは伊達温泉で昼食をとり、室蘭港や白老港を見学してから自宅に戻った。



49 cmのイシモチ。41 cmのタカノハ小さく見えます



持ち帰った全釣果。この他に小物が多数あった

## 【目黒港のカンカイ】

平成28年度第4回大会が7月3日（日）、千平川～目黒港で開催された。予定していた音調津港までの道程は大雨警報発令のため目黒港から先は通行止めとなってしまったのだ。サルル川の橋を渡った所で赤色灯が点滅しており、これより先へは行かせませんとご丁寧にパトカーまで動員していた。急遽、役員会を開いて目黒港までとしたが、予定して釣り場に立てなかった会員の諦めきれない溜息も漏れた。

天気予報では波が3m、雨が昼頃まで続くと予想していたが、明け方を迎えるようになると雨もあがり波も少し穏やかになってきて全く釣りができないというわけでもなかった。

私は、天気予報から音調津港周辺とした釣り場候補地を急遽目黒港とした。目黒港に下り立っていくとすぐに舟揚場があった。ここで釣りをするのは初めてだが、何となくこの舟揚場周辺でタカノハの記録があったのではないかという淡い記憶でそこに入ったのだ。

バスから下りてリュックを担ごうとすると荷の重さに耐えかねて肩掛けバンドが切れてしまった。キャスターを持ってきていたので肩掛けバンドの外れたリュックを乗せて運んだ。

堀内氏も続いてやって来た。二人してアカハラを確保しましょうとゴロ仕掛を打った。すぐにチョンチョンとしたアタリが出て30cm弱のカンカイが上がった。更にクロガシラ、アカハラと続いた。期待したタカノハは釣れなく、30本ほどのカンカイを釣ったがオオマイと言えるようなものはなく、40cm弱のアカハラが4本になったところで場所を変えることにした。小物ばかり釣っていても勝負にならない。

まずは目黒覆道、サルル覆道と波の様子を見に行った。釣り人が何人か入っており、更にその奥のオンコの沢方向に向かった釣り人が何人もいたらしい。波はかなり高いが明け方の干潮時には治まってくると踏んでの竿出しらしい。大きなうねりが来る度に竿尻を押しさえ込まなくてはならないようだった。目黒漁港寄りには、沖に防波堤がある所為か釣りができそうである。

漁港内に戻ってみると、堀内氏の仕掛が私の道糸に絡み付けていた。私の道糸を切って仕掛を外し、竿を片付けカンカイの腹を取って移動の準備が出来た。その時になって堀内氏の絡んだ全ての仕掛がようやく解けたようだった。

目黒漁港と目黒覆道の間で防潮堤の上から竿を出した。しかし、時折大きなうねりがやってきて竿が落ち着かない。もう少し、漁港寄りに移動して波の死んだところに移動して竿を出した。隣にはやはり目黒漁港から避難してきた前野氏が入っていた。遠投に徹したが、オモリが落ち着かなく海藻もあまり生えていないようだった。それでもってここではハゴトコ3匹の釣果に終わってしまった。婿は目黒港で釣った40cm弱のアカハラ、嫁は35cm弱のカンカイになった。秘密の釣り場を発見するには至らなかった。



目黒漁港右の磯



隣で頑張っている前野氏





左から準優勝：矢根氏、優勝：片岡氏、身長優勝：荻野氏、3位湯浅氏

優勝は、咲梅に入った片岡 浩氏でアブラコ49.1cm、カジカ47.5cm、重量7.14kgで1,680点という稀にみる高得点だった。朝までに中型アブラコやカジカを揃えていた片岡氏だったが、エリモの8:30といわれる潮時に、どれも120mを越える遠投で、婿嫁をとっての圧巻だった。両隣に我が会きっての大物釣り師である西川氏、吉井氏に挟まれた格好になったが、彼らを押さえての優勝である。吉井、西川の両氏もアブラコの大物を揃えたが、嫁が来なくて涙を呑んだ。

身長優勝は荻野一利氏だった。白浜トンネル裏に入った荻野氏も朝方の8時頃に集中的に獲物を揃え、その中に46.3cmのアブラコを混ぜたのだ。総合でも2位に相当する成績だった。

準優勝は有明に入った矢根政仁氏、3位は駒止に入った湯浅伸一氏で、私はアカハラとカンカイだけでかろうじて5位に滑り込むことになった。さて、前半戦が終わった。年間大物賞間違いなしといわれるものも上がったが、まだまだ後半戦に向けて体調を整え、秘策を練り直して臨みたいものである。